

求道詩歌誌

余白の風

二〇一九年三月号
第二三七号
奇数月二〇日発行

宰者一
行栄
主発平
田栄

俳句や短歌をつくりながら、

「南無アツバ」の心を養いましょう。

作品とエッセイ *選評

豊田・佐藤淡丘

よくみれば真砂流る、春の川

ひばりあがるむかし野壺のある辺りか

水温むに川音ばかり雲二・三

はこべらを摘みて帰りの程のよさ

紫蘇洗ふ低き川筋みてをりぬ

「野づら行」といふ言葉があるかどうか

かりませんが、俳句が出来なくなると、近く

の原っぱとそれを過ぎる小川が好きで、ふら

りと出掛ける。水辺に降り立つうちに、句意

が湧き、忘れぬうちにメモ帳を取り出す。

これぞ、アツバさまの為せるわざか。

南無アツバ・南無アツバ

*本当に「これぞ、アツバの為せるわざ！」

としか思えないような発想を戴くこと、どな

たでも経験があると思います。アツバは巧妙

に私たちの心に介入されます。

電線に居並ぶ小鳥冬の空

鳩にポウ猫にニヤオと声をかけ

小雪舞ふ崖駆け降りぬ黒き猫

プレパトについて行けずに目を閉じる

高知・赤松久子

娘の病希望ゆらぎて南無アツバ

*久しぶりの御出句ありがとうございます。

「俳句は祈り」(拙著『俳句でキリスト教』

13頁参照)この場では何度か確認したことで

すが、この句会(報)は、俳句や短歌の一般

的な意味での出来を問題にしません。各々が

祈りとしてどのように俳句に取り組んでいる

か、それだけが大事なのです。参加者の継続

した祈りを希望します。

大阪・島一木

信徒にはあらねど人間イエスを想ふ三十

数年のその生涯を

身に入むやメダイのマリア手をひろげ

秋日さすロザリオの珠は透明に

文化の日ラテン語のミサ肅々と

小春日や父の祈りとわが祈り

*①キリスト者以外にも、「人間イエス」は

人気が高い。そのイエスがどうしてキリスト

になったのか、という所が肝であるのに、最

も説明し難くもある。

昭島・新堀邦司

神々を迎へ出雲の酒旨し

硝子絵の天使も歌へクリスマス

「ノエル」てふ珈琲を飲み聖夜かな

婿どもの吾も酔ひたり年の酒

新春駅伝天下の嶮を駆け登る

*④新年のお酒は程よく酔いたいもの。イエス様も「カナの婚礼」に参加して、皆といっしょに楽しんでいたことでしょう。

名古屋・片岡惇子

凍て蠅の影に光や列車着く

紅梅の香白梅包み時を待つ

紅梅や白梅眩し生きし道

日脚伸ぶ影は未来今は確と

満天の星に招かれ天の門へ

小学四年の疎開先の十一月末。父親の思い

で一晩中外に追い出されました。その時見た

空は、満天の星で、この不条理を見ていて下

さる偉大なものの存在を感じました。偉大な

ものの実体験の満天の星でした。

昨年十一月肺炎にかかり、肺の内視鏡の検

査を終え、麻酔から覚めた時、一瞬ではあり

ましたが、私のまわりは、満天の星でした。

*神のお導きの不思議。どんな不条理も最終

的に善へと変えてくださる。イエス様のご復

活が証明するように、アツバはこの世とあの

世を横断的に、トータルで見えていてくださ

います。南無アツバ

求道俳句自解

蓮田・平田栄一

地の塩も世の光も皆主に発す

キリスト者は、「地の塩」になれ、「世の

光」になれと言われます(マタイ五章)。し

かしそれは私たちが褒められるためではなく、

人々が私たちの行いを通して、「神

を崇めるようになるため」だとい

うのです。あくまで主役は神です。

私たちはその神の働きの「場」に

過ぎません。



○平田栄一求道俳句集

第2集『アッバを呼ぶ』(一〇〇〇円)
第3集『悲愛のころ』(一〇〇〇円)

以上お申込みは、平田まで。〒一八〇円

○『俳句でキリスト教』(サンパウロ、一六〇〇円)
こちらは、アマゾンでも購入できます。

『福音歳時記』より

聖堂の中庭にして地虫出づ 大橋宵火
啓蟄や聖書にはさむ朱の葉 長田等
春めきて教理研究始まりぬ 松下涼風
外人墓地雪の彼岸となりけり 大野愛子
聖体灯赤くあたたかましませば 山口青邨

①アッバのお庭が温もつて。②「朱の葉」には、文語聖書が似合う。③縮こまっていた体も伸び、頭も回転してきます。④お墓、雪、お彼岸、意外に違和感がない。⑤井上神父の「いいのかな こんなことで」という詩(『風の薫り』選集別巻、20頁)、「がくつとからだの前に折れて／はつと開いた目に／赤いランプの灯が飛びこんでくる／あ そうだ／お祈りしながら眠っちゃったんだ」にはじまり、小さい頃のお母さんの思い出が語られる詩があります。その結句は、

赤いランプとお母さん

そしてイエスさまのまなざし

みんな一つになって

ゆらゆらと

夢の波間にただよっている

この詩の製作は一九九〇年、神父63歳。私の私の歳です。このごろ不思議なことに、働き盛りの壮年期のことは、忙しかったという

ことしか覚えていないのに、幼少年期のことが、今まですっかり忘れていたことまで度々思い出されます。

アンソロジー・井上神父の言葉

○なすべきこと

イエスが神のお望みであった十字架の死をえらびとつたように、一人一人が神から与えられた自分の十字架を背負ってイエスに従って神のふところに入ること、それがイエスの人々への要請であったことは間違いない。(中略)自分を捨てるということは、自我にこだわらず、全てを神の聖旨にお委せすることに他ならない。▽(「子を思う母のまなざし」選集8、48頁)

*神父は「自我実現」と「自己実現」はちがうと言います。狭い自我を明け渡し、各々の人生がアッバの業が行われる「場」となること、それが真の自己実現です。

○日向ぼつこの祈り

△思いが、あちこちへと飛翔するなら、それはそれで自由に泳がせておけばよい。小さかったときの思い出、様々な人たちとの出会い、嬉しかったこと、淋しかったこと、いやだったこと、明日の心配、と、どんどん自由に泳がせて、ふと気づいたときに、あるいは最後に、それら全部を「明日のことを思いわずらうな」「野の百合、空の鳥を見よ。神はこれらをあたたかく養っていてくださる」という『マタイによる福音書』のイエスの言葉に重ねあわせ、自分の生涯を野の百合、空の鳥の

ごとくみなし、これらと一体化させ、さんさんとふりそぐ太陽の光のような神の悲愛のまなざしのもとに、その自分を眺めるようにする——それが私のいう「神の悲愛の日向ぼつこの祈り」である。▽(「小鳥の詩のごとき、おのずからの祈り」選集8、220頁)

○俳句と祈り

△おのずからが、みずからになったとき、そこに歌がうまれ、俳句がうまれ、絵がうまれる。そして、おのずからが、あちからになったとき、そこに祈りがうまれ、宗教の世界がうまれる▽(「小鳥の詩のごとき、おのずからの祈り」選集8、222頁)

*「祈りと歌」さらに「日本文化における宗教と芸術」の関係といった「大きな問題」について、神父は「今のところは」とことわりながら、このように整理してくれている。

○南無アッバの集い&平田講座(於・四谷ニコラバレ)日時3/23(土)午後1時半〜。4/27(土)同、5/25(土)同。

「余白の風」入会案内

どなたでも参加できます。購読のみも可

*年六回奇数月発行 *年会費千円(送料共)

*採否主宰一任(本会の趣旨にそって添削する場合があります。)

*締切〓偶数月二十日

*ブログ「南無アッバを生きる。」に掲載します。

*〒振替口座00170・3・260909 平田栄一